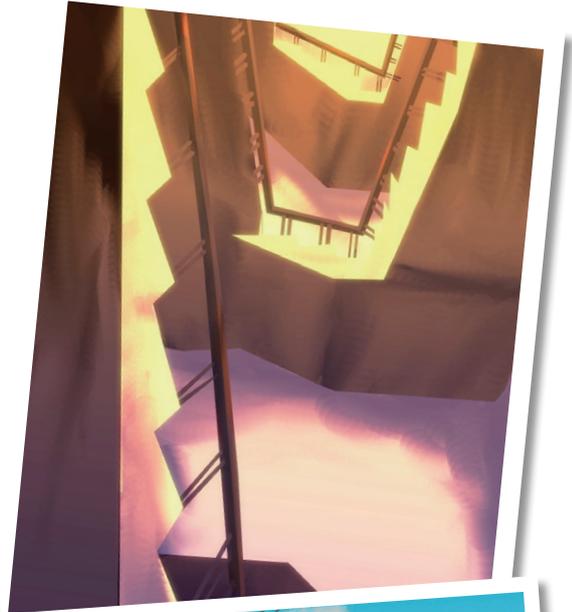


図書館だより

Library News No.71
Nara National College of Technology

2014年3月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、1C 濱邊幸奈さん（左上）、1C 佐竹香保さん（右上）
1M 緒方拓海君（左下）、1E 下村奈穂さん（右下）の作品

目次

巻頭言 「一步を踏み出す勇気と決断」.....	2
多読表彰について.....	3
読書感想文コンクールを終えて.....	4
読書感想文入賞作品.....	6
学生図書委員会活動報告ほか.....	12
information	14

一步を踏み出す勇気と決断

物質化学工学科 嶋田 豊司

1. 読書から得られる豊富な知識

平成 25 年度の物質化学工学科の特別講演会を新年 1 月 9 日に実施した。その講師として本校 2 期生の百瀬隆氏にお願いした。百瀬氏は、現在株式会社ダイセルの知財センター長の他、大阪大学、大阪府立大学、早稲田大学など 5 大学で非常勤講師を務められ精力的に活躍されている奈良高専の大先輩である。講演の中で、年間 100 冊を読む習慣を 30 歳から続けていてその数は、すでに 3000 冊以上に及んでいるとのことである。百瀬氏は、東工大で修士課程を修了後、30 歳で渡米し、イリノイ大学で MBA を取得されている。またその 4 年後、同じく東工大で博士の学位を取得されて、ダイセルに入社された後、38 歳の時に会社からの要請で、米国での特許訴訟の責任者として再び渡米されている。弁護士との折衝を行う傍ら、米国弁理士試験にも合格されている。私はその多分野にわたる学業意欲と向上心、それと米国での特許訴訟という途轍もない大役の受諾など、その意欲はどこからくるのか尋ねてみた。その答えは、いろいろ経験することにより少しずつ培われてきた自信であろうということであった。もちろん何事にも意欲的な性格は百瀬氏の生来のものかもしれないが、目の前に次々現れる壁を乗り越えてみようとする意欲は、学生の皆さんにとっても、将来の指針になることは間違いない。また、読書から得られる豊富な知識が自らの自信を上げることにも間違いないであろう。高専で学ぶ皆さんにとって、ほとんど全てが新しいものとの出会いであるはずである。その時々で躊躇もするかもしれない。しかし、一步を踏み出す勇気と決断こそがこれからの自分自身にフィードバックされることを忘れてはならない。悩んだとき、加藤諦三氏の本を手にとってみるのも助けになるかもしれない。

2. 技術立国日本？

電子立国日本の自叙伝という NHK の番組が 1991 年に放送された。まさに日本が世界のエレクトロニクスを発展を牽引してきた確固たる歴史を紹介する番組であった。しかし、現在、残念ながら韓国、中国、台湾などアジア諸国の追随をゆるし、優れた技術者の何割かは海外で活躍するようになり、追い越された科学分野も多くなってしまった。その要因の一つに若者の消極性があるようではない。OECD の 2013 年度の調査によると海外に留学している学生の割合は 1.0% で 33 カ国中ワースト 2 位である。これは留学しなくても日本の技術力が進んでいるという解釈もできなくはないが、内向き、消極性の増加、などと揶揄されることも否定できない。高専生を見ているとまだ、積極性を持つ学生はいると胸をなで下ろす反面、その割合は減少しているように感じる。これは今後の日本にとって決して良くはない。積極性を持つためには小さなことから始めればよい。例えば、公の場で質問できるだろうか。ある程度の知識を持たないと勇気が出ない。まずは、そんなことから始めてみてはどうか。一つ階段を上る感覚が得られるかもしれない。

アジア諸国の躍進と言え、私の化学分野では、世界のトップ誌と言われる Journal of the American Chemical Society (JACS) 誌の掲載論文数は (阪大の福住先生の調査)、2009 年の日本の掲載数は 458 報で、韓国と中国を合わせれば 344 報である。この数字は決して安心できる数字ではなく、1999 年では、韓国と中国で合計わずか 22 報であった。2009 年以来日本の研究費は減少し、各国が予算を増額していることを考えれば、2014 年のデータは恐ろしい気がする。これからの日本を支える君たち学生の皆さん、一人一人の積極性が日本を再生させる重要な鍵になり、発展的日本が構築されることを念じてやまない。

多読表彰について

【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書を購入ができる権利を贈りました。



第1位	機械工学科5年	(23冊/人)
第1位	機械工学科4年	(23冊/人)
第1位	電子情報工学専攻1年	(23冊/人)
第4位	機械制御工学専攻1年	(21冊/人)
第5位	物質化学工学科2年	(18冊/人)
第6位	電子制御工学科3年	(16冊/人)

【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	機械工学科5年	澤井久実さん	第6位	物質化学工学科2年	吉田 航さん
第2位	電子情報工学専攻1年	岸本 光さん	第6位	機械工学科4年	北園一将さん
第3位	情報工学科5年	山門 彩さん	第8位	電子情報学専攻1年	糸田悠甫さん
第4位	機械工学科4年	松本 葵さん	第9位	電子制御工学科1年	佐藤爽太さん
第5位	物質化学工学科1年	松下紗也子さん	第10位	物質化学工学科5年	松下由賀子さん

表彰式は1月6日（月）昼休みに校長室にて行われました（5ページの写真をご覧ください）。

図書購入リクエスト、随時受付中！

図書館カウンターに用紙及び投函箱を設置しています。図書館ホームページからもリクエストを送ることができます。（HOME > 資料検索 > 推薦（希望）図書）

読みたい本、図書館に置いてほしい本があれば、是非リクエストをしてみてください。

ただし、無条件に購入できるわけではないので注意してください。

〔例：ライトノベルの4巻以降、楽譜、漫画等は不可等〕



平成 25 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第 38 回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1 年生から 3 年生まで、あわせて 370 編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会の教員 7 名と国語科教員 3 名で審査と投票を行った結果、8 名の入選作を決定しました。ここに改めて入選者の名前と受賞タイトルを挙げ、榮譽を称えます。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

電気工学科 1 年	堀口 颯馬	「戦争の実態—「永遠の 0」を読んで」
電子制御工学科 1 年	粟生 小百合	「永遠の 0 を読んで」
情報工学科 1 年	林 大泰	「部活での経験とは—「歌え！多摩川高校合唱部」を読んで—」
物質化学工学科 1 年	大西 朝登	「すべてを捧げる仕事—「鉄道員」を読んで—」
情報工学科 2 年	宮本 靖貴	「障害者福祉のあり方」
機械工学科 2 年	松林 悠汰	「サムライ魂」
物質化学工学科 2 年	小谷 ひかる	「生きるための力」
物質化学工学科 3 年	隅谷 大良	「権威に対してどう向き合うか—「城」を読んで—」

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品を佳作としました。作者名を紹介し、努力を称えます。

佳作

1M 小川 椋太郎	1M 田村 直人	1M 中島 吉規	1M 吉村 寛人
1E 紀伊 凜香	1E 弘瀬 雅也	1S 黒田 晃市	1I 黒田 晃平
1C 甲斐 萌	1C 西澤 峻平	2M 松内 秀直	2E 伊庭 由季乃
2E 出口 達也	2S 佐藤 優志	2I 真弓 凌輔	2C 坂本 大河
3M 石田 豊			

さて、入選作品についてそれぞれ簡単に講評しておきます。入選作品とあわせて読み、自分が読書感想文を書く際の参考にしてください。

本年度は、百田尚樹『永遠の 0（ゼロ）』についての感想文が多く寄せられました。同書の映画化が話題になったり、いわゆる「零戦」の開発技師をモデルにしたアニメ映画が公開されたりしたことで、興味を持った人が多かったのでしょうか。優秀賞にも 2 作品が選ばれています。

まず 1E 堀口さんは、主人公・宮部久蔵が家族と再会するために戦場で生きること执着していた一方で、特攻隊に志願した理由を軸に、宮部久蔵の苦悩や願い、戦争の悲惨さについて自分の考えをまとめました。惜しむらくは裏表紙の紹介文を引用しすぎていることです。読書「感想」文ですから、読んで考えたことに十分な分量が割けるよう工夫してください。

1S 粟生さんは、同じく『永遠の 0』について第二次世界大戦における日本海軍の無謀さをまとめた上で、科学技術とそれを利用する人間の在り方について普遍的な問題を指摘しています。読書の醍醐味は虚構世界

を通して現実世界が抱える問題を発見することにあります。皆さんもこの発見を大切にして、自分の言葉で感想をまとめてください。

1I 林さんは実話を元に書かれた本を取り上げました。高校生が「強い思い」を持って部活動に取り組むさまは、共感しながら読むことができたのではないのでしょうか。林さんが文中で触れた星野富弘氏の作品集は本校図書館にも所蔵されています。星野氏が障害を得て画家・詩人になるまでを振り返った『愛、深き淵より』とともに、ぜひ手に取ってみてください。

1C 大西さんは家族に先立たれ、鉄道員の仕事も終えようとしている乙松の姿を描いた『鉄道員（ぽっぽや）』を取り上げ、働くということ、「他人を想いやり、想いやられながら生き」ることについて考えをまとめました。10年後、皆さんの多くは社会人として活躍しているでしょう。自分はどんな風に生きていきたいか、社会に出る前にぜひ考えてもらいたい問題です。

2M 松林さんは幕末に活躍したジョン万次郎のアメリカ時代を描いた小説に取り組みました。今から200年近く前の人々にとって、今以上に世界は広く、異文化は受け入れにくかったはずですが。ジョン万次郎はいかに世界を受け入れ、また異国で受け入れられていったのか。登場人物であるホイットフィールド夫人の言葉を最初に紹介することで、読み手の興味をひく感想文になっています。

2I 宮本さんは障害者の暗部を描いたルポタージュに取り組みました。障害者は社会的弱者だと言われますが、どう弱者なのか、その実態は見えにくいものです。タブー視され、積極的に報道されたりしないからです。しかし、社会の一員として「目を向けなければいけない」ことだと宮本さんは言います。これから社会を作っていく人の言葉として、とても頼もしく思いました。

2C 小谷さんは梨木香歩の小説を手掛かりにして、人間の死と、そこに至るまでにいかに生きていくかということを考えました。同じようなことを考えたことがある人も多いでしょう。「死とは何か。そもそも私たちはなぜ生きているのか。」前半にある読者への問いかけが効いています。

3C 隅谷さんは19世紀から20世紀を生きた作家、フランツ・カフカの作品に取り組みました。権威に対して反抗したり不服従の態度をとるのではなく、どうすればうまく付き合うことができるかという、社会的な問題を軸にまとめています。未完の小説であることに注目し、主人公はどうすれば権威の象徴である城にたどり着けるかというまとめ方が巧みです。小説の内と外、また現実世界に置き換えてみるなど、感想文を書く際に色々な着眼点があることを示してくれています。

最後に、「人は何のために読書をするか」ということを皆さんに問いかけたいと思います。

読書とは自分を外の世界とつなげる行為です。外の世界とは自分や自分が生きている世界以外の世界、他人であり現実であり理想や空想、つまり「他者」の総体ともいえます。

そういう風に考えると、「自分は理系だから…」「高専生だから…」というのは読書をしない理由にならないのでは？むしろ実際的で専門的な技術を身につける高専生だからこそ、他者としっかりつながっていけるようになってほしい、学生時代に読書を通して、こころを鍛えてほしいと思います。来年度も引き続き積極的な参加を期待しています。

(国語科：刀田)



読書感想文入賞作品

『永遠の0』 百田尚樹 著

戦争の実態

－「永遠の0」を読んで

電気工学科1年 堀口 颯馬

「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために」。そう言い続けた男はなぜ自ら命を落としたのか。終戦から60年目の夏。健太郎は死んだ祖父の生涯を調べていた。天才だが臆病者。想像と違う人物像に戸惑いつつも、一つの謎が浮かんでくる。記憶の断片が揃う時、明らかになる真実とは

この内容紹介に興味を持ち、僕は「永遠の0」という本を手に取りました。

「永遠の0」という本は、人生の目標を失いかけていた青年・佐伯健太郎とフリーライターの姉・慶子が、太平洋戦争で特攻に志願し戦死した祖父・宮部久蔵について調べ始めることから物語が始まります。物語が進むにつれて元戦友たちの証言から浮かび上がってきた宮部久蔵という人物は、戦闘機乗りとして凄腕を持ちながら、異常なまでに死を恐れ、生に執着する男でした。僕は妻を愛し、「生きて帰る」という約束にこだわり続けた宮部がなぜ特攻に志願したのかとても不思議に思いました。しかし、物語を読み進めていくと宮部が特攻に志願した理由がなんとなく理解できました。宮部久蔵という人物は、何よりも命を大切にす人物でした。それは、戦闘機乗りの時に部下に言った「どんなに苦しくても生き延びる努力をしろ」という言葉や、特攻隊員の教官の時に教え子が上達していくことを辛そうにしていたことからよく分かりました。しかし、宮部は飛行機乗りとして、教官として多くの部下や教え子を死地へ送らなければなりません。宮部が何よりも命を大切にす人物だからこそ、自分の存在に悩み苦しんだのだと思います。特攻隊に志願したのは、悩み苦しんだはてに自分の死をもって残された人達に希望を託そうとしたからなのだと思います。

この本を読んで、僕は戦争の悲惨さを再認識しました。それはこの本が戦争という時代に巻き込まれた青年達の心情を描写しているからです。心の中で「生きたい」と思っても、それを口に出せない時代の空気。絶望的な状況で無意味と思える作戦でも、上官の命令に逆らえないために命を捨てなくてはならない軍人達。特攻隊員の自分が死ぬことへの恐怖や、家族や恋人への思い。それらの全てが生々しく描かれています。僕は今まで志願制である特攻隊は、

愛国心に溢れ命も惜しまない軍人が行っていたのだと思っていました。しかし、実態は志願制とは名ばかりで、命令と同じようなものだったと分かったときは、とても衝撃を受けました。特攻隊ですら戦争という時代に巻き込まれ、悲しい末路を辿った人達の一部であり、その上絶対に死ぬということが決まっていた彼らは、この戦争の一番の被害者だったのではないかと思いました。彼らのような被害者を増やさないためにも、僕達はこの世界の平和を守っていかねばならないと思いました。

『永遠の0』 百田尚樹 著

零と出会う

電子制御工学科1年 粟生 小百合

私がこの本を読んだのは、姉に感動したからぜひ読んでみてはと薦められたからだ。読み進めていくと興味深く、沢山のことを考えさせられた。

この物語は、主人公とその姉が特攻隊で亡くなった祖父の生涯について知るために、祖父のかつての戦友たちを訪ね、調べていく話である。初めに訪ねた人によると祖父は臆病者ということであった。しかし、調査を続けるうちに実は祖父は腕の立つパイロットだが、軍人らしくない人だったということが分かった。階級制度が厳しい軍隊の中で部下に対しての言葉づかいが丁寧で優しくかった。さらに、「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために。」と言いつづけた。天皇のために死ぬことが正義とされていた時代に周りの目を気にせず自分の意見を曲げない祖父は本当はとても強かったのではないだろうか。

また、調査を進めていくうちに、この戦争がどれだけ無謀だったのかも分かった。ガダルカナル島での陸軍の戦いは、場当たりの作戦だったため、兵士達が将棋の駒のように使われた。軍の中核は敵情偵察もろくにせず、実際は一万三千人いた米軍の兵力を二千人とみて、わずか九百人あまりの部隊を送り込んだのだ。また、日本陸軍は銃剣突撃が基本の戦法だったのに対し、米軍は重砲や重機関銃と軽機関銃を用いた戦法だった。こんなの勝てるはずがない。陸軍の中核は何を考えていたのだろうか。桜花も無謀な作戦だった。桜花とは人間が操縦するロケット爆弾のことだ。自力で飛び出すこともできず、着陸することも出来ない。旋廻も出来ず、ただ真っ直ぐに滑空する。一式陸攻に懸吊され、上空から敵に向かって飛んで行くだけの人間ロケットだ。

このように軍部は兵隊の命を何とも思っていなか

ったのだ。特攻隊はまさにその典型である。うまくいけば一人の人間と一機の戦闘機で軍艦を一隻沈めることができるかもしれない。その一発命中のために数十人の命が無駄になることは仕方がないと考えられていた。なんて酷いのだろう。

さて、タイトルの0は零戦のことである。戦争が始まったころ世界で零戦と互角に戦える戦闘機はまだなかった。格闘性能がずば抜けている上にスピードが速い。さらに航続距離も桁外れだった。当時の単座戦闘機の航続距離は大体数百kmだったのに対して零戦は三千kmを楽々と飛んだ。零戦を作ったのは堀越二郎と曾根嘉年である。彼らは戦争のために飛行機を作ったわけではない。しかし、戦争で使われ、多くの命を奪う結果となった。どんなに素晴らしい技術でも使い方によっては殺人兵器になってしまう。例えば原子力発電所もそうではないか。私も技術者になりたいと思っている。技術を追求するのは大切だが、その技術が本当に人の幸せに貢献できるかまで考えなければならぬと深く感じた。

この本を読むまで、私は特攻隊も含め、戦争がこんなに悲惨だと知らなかった。言いたいことも言えず、将棋の駒のように命が奪われていく戦争は恐ろしいと思う。そんな時代の中で生きたいと主張し続けた主人公の祖父は本当に信念が強い。今、中国や韓国から日本は歴史認識が間違っていると指摘され、国交がうまくいっていない。私達は今こそ過去の戦争と真剣に向き合い、学び続け、自分の意思を固める努力をしなければならない。

歌え！多摩川高校合唱部 本田有明 著

部活での経験とは

—「歌え！多摩川高校合唱部」を読んで—

情報工学科1年 林 大泰

この話の舞台となる多摩川高校は神奈川県有数の進学校。部活動は運動・文化部ともに盛んで、合唱部は2年に一度は県代表として関東大会に出場するほどだ。主な大会は、NHK 全国学校音楽コンクール（通称：Nコン）であり、今年度はそのNコンに力を入れる理由があった。

その理由とは、この春卒業していった合唱部の平峰千晶が応募した詩「あしたはどこから」がNコンの課題曲に選ばれたからだ。昨年度、多摩川合唱部はNコンで予選敗退していた。その後、昨年度の3年生最後の機会である定期演奏会で「あしたはどこから」を歌い、当時の2年生たちは自分たちが先輩たちの「あしたはどこから」を受け継ぎ大切に

歌っていくんだと心に誓ったのだった。

そしてこの本の話は、新一年生たちが合唱部に出会うところから始まる。合唱部としては抜けた3年生の穴を埋めるのもあるが、現在部員24人（内男子4人）の中で、男女混声合唱を維持するためにも男子を獲得することが最優先事項だった。そして勧誘の結果、21人（うち男子7人）が入り、とりあえず合唱部としての人数は揃ったのであった。

しかしその1年生たちは先輩から「宇宙人」と呼ばれるほどにこれからどんなことになるかわからないメンバーが揃い、そんな1年生に優しく接するも不安やプレッシャーを感じている2年生、昨年度の経験から強い覚悟を持つ3年生たちの合唱部が、Nコンに向けて活動していくのだった。

私はこの本の中で、新入部員である乙川光太の「重い読書体験」について深い印象を受けた。乙川が先輩の錦野ユカリに紹介された「ばら・きく・なずな」という楽曲の作曲者、星野富弘さんの詩画集「四季抄 風の旅」（立風書房）という本を読み、その曲の本質について読み解いていく場面だ。

乙川はこの本を読み、作者は大怪我をして体の自由を失い、9年間もの入院生活の中でこうした絵を口で書けるようになったことを知る。さらに「神様がたった一度だけ この腕を動かしてくださいとしたら 母の肩をたたかせてもらおう…」という詩の部分に強い思いが込められていることを感じたのであった。そして乙川は「その人の作品を、ぼくたちは音楽にのせて歌うことができる。それは当たり前のようにもあるけれど、よく考えてみると、なにかものすごい奇跡でもあるような感じ。」と、本を通して詩に込められた思いを純粋に感じ取り、歌えることの素晴らしさを改めて実感したのである。同じように他の部員たちもそれぞれの強い思いを持って合唱に打ち込んでいくのだった。

私にはこの合唱部で過ごしたことが部員たちにとって、人生において「重い体験」になっているだと伝わってきた。後日談の中でも、高校時代という青春の中で得た経験がその後、かけがえのない大切なものとなっているのがひしひしと感じ取れた。

高校時代に部活動に打ち込むことはとても大切だと思う。私は現在運動部に所属し、それに打ち込んでいるが、文化部というものにそれほどの思いは感じなかった。だが、この本を読んで文化部に対する考えも変わった。たとえ運動部、文化部どちらであろうと、そこで出会う仲間や経験はかけがえのないものであり、違いは無いのだと考えるようになった。結局、純粋に部活に打ち込むほど、後に人生を語る上で大切な「重さ」になるのだと思う。私もこれからはそのことを意識して部活に打ち込むつもりだ。

鉄道員 浅田次郎 著

すべてを捧げる仕事

- 鉄道員を読んで -

物質化学工学科1年 大西 朝登

幸せな最期だったと僕は思う。娘にも妻にも先立たれ、人生を共にしてきた幌舞線もとうとう廃線が決まってしまった。それでも乙松の最期は幸せだったろうと僕は思う。何一つ後悔はなかったと思う。

四十五年間、乙松はポッポヤとして生きてきた。そして、乙松はその間、決して涙を流さなかった。集団就職の子どもたちを自分の駅から送り出したとき、死んだ娘が自分の電車で帰ってきたとき、仕事のために妻を看取れなかったとき。どんなにつらいことがあっても彼は、ポッポヤが泣くわけにはいかんべ。と言って涙をこらえた。

なぜポッポヤは泣いてはいけないんだろうか。もし僕なら、彼のように涙をこらえることは絶対にできないと思う。僕は、ポッポヤという仕事は自分を殺さなければ務まらないほど厳しい仕事なのだろうかと疑問に思った。でも、傍から見れば、鉄道員の仕事はそんなに大変そうには見えない。僕は今まで、鉄道員の仕事は、電車が来れば誘導し、また送り出す。ぐらいのことだと思っていた。でももしポッポヤの果たすべき仕事がそれだけだったら、乙松も、仕事のために涙を流さないなんてことはしなかっただろう。でもポッポ乙松の仕事は僕が想像していたようなものではなかった。雨の日も雪の日も一人ホームで通学生を送り迎えしたり、そして雪のように冷たくなってしまった娘を自分の電車で迎えたこともあった。そんな仕事は半端な気持ちでは決して務まらない。だから乙松は涙を流すことさえやめてしまったんだと思う。

乙松は仕事を愛し、仕事に身を捧げた。だからその分、心の中には家族に対する後ろめたさがあったと思う。でもそんな気持ちは、ユッコとの再会でときほぐされていった。半世紀ものポッポヤ人生の思い出話を娘に聞かせてやれたこと、そして娘との再会、交わした言葉。それらが、彼の背中にまるで体の一部のようにへばりついてきた「ポッポヤ」という重たい荷物をおろさせてくれたのではないだろうか。ユッコが「もういいよ。お父さん。おつかれさま。」と言ってくれているような気がする。ユッコは、父を楽にさせてあげるために、やってきたのだろう。乙松は、やっと涙をこぼすことができ、幸せだったと思う。

僕はこの本を読んで「ポッポヤ」になりたいと思った。鉄道員になりたいということではなく、自分の全てを捧げられるような仕事をしたいと思えるようになった。僕はまだ高専の一年生だから、将来の仕事のことはまだおぼろげにしかわからない。でも「ポッポヤ」になるという目標は、これから持ち続けたいと思う。そして、少し欲張り過ぎかもしれないけど、できることなら佐藤乙松のように他人を思いやり、思いやられながら生きたい。そして彼のように「そこらの偉もんの葬式とはわけがちがう」、みんなに愛されながら見送られる葬式をあげてもらうことができれば、どんなに素晴らしいだろうと思った。

累計障害者 獄の中の不条理 山本譲司 著

障害者福祉のあり方

情報工学科2年 宮本 靖貴

テレビ等のマスメディアにおいて、障害に負けず仕事を頑張る障害者、芸術活動に才能を発揮する障害者、パラリンピックに出場し優秀な結果を残す障害者など多くの努力する障害者がしばしば取り上げられている。しかし一方で、問題行動を起こす障害者がいるのも事実である。この本はそんな障害者の中でも特に犯罪を犯した障害者たちの実情を紹介し、解決策を模索している。

まず私が驚いたことは、犯罪を犯した障害者のほとんどが同じような罪を何度も繰り返し、何度も服役していることだ。その理由は、彼らにとって刑務所は外の世界よりも暮らしやすいからというものである。出所しても福祉サービスを受けることが出来ず、浮浪者となりまた罪を犯す、この悪循環から抜け出せないのだ。健常者であれば未だ十分とは言えないが更生施設などで補助を受けることができるというのは大変な問題だと考える。また、そもそも犯罪に手を染める原因となった一部には福祉の対応の不十分さがあり、日本の障害者に対するサポートは早急に充実したものにしていけることが重要だ。

現在の社会においての居場所の少なさによって、障害者の中には売春婦やヤクザとして生きている者がいることにも驚いた。本文に出てきた知的障害の売春婦が、「障害者はね、好きな人ができて本気で付き合っても、すぐにバカがばれて捨てられちゃうの。でも私を抱いてくれた男の人はみんな優しくった。」と嬉しそうに語る場面から、それら彼女に

とっての「生きがい」になっていたであろう事実は、あまりにも切なすぎる。また、ヤクザ組織に身を置く知的障害者が、「俺よー、今めっちゃ楽しいんだ。周りには俺と同じようにムシヨ上がりがいっぱいいるし、組の兄貴たちにも可愛がってもらってるし。」と刑務所にいたときよりも生き生きと話す場面があり、彼にとってそこは生まれて初めて見つかった自分自身の居場所なのかもしれないと思うとあまりに哀れである。路上生活、閉鎖病棟への入院など適切な福祉を受けられない障害者らの現実には悲惨なものであった。

冒頭で述べたように、努力する障害者をメディアは取り上げるのだが、犯罪を起こしたりした事実はタブーとして隠蔽する。多くの福祉関係者は、近辺に犯罪を起こした犯罪者が現れたとしても、彼らを極めて特異な存在として受け取り、福祉的な支援の対象から外してしまう。こうして障害者らは刑務所への「入口」へと向かうという。悲しいかなこれが今の日本の現状だ。私たちは障害者、そしてその福祉について考え直し、現状を改善しなければならない。生きていくうえで社会の闇にも目を向けねばならない。そう思われた一冊であった。

ジョン万次郎 海を渡ったサムライ魂 マーギー・プロイス、金原 瑞人 著

サムライ魂

機械工学科2年 松林 悠汰

ホイットフィールド夫人の「世界を変える手助けをしない？」という言葉が、端的に世界というものを表していると思う。この言葉の通り、社会や世界といったマクロな視点に立った時、私たち人間は、その変革の手助けしかできない。言いかえれば、自分一人の力だけでは、何も変えられないのだ。しかし、その社会や世界をミクロな視点で顧みると、その社会や世界を形成しているのは、私たち一人ひとりの人間でしかないとはいえる。だから私一人の力では世界を変えられなくても、私たちが力を合わせれば、世界を変えるきっかけと成り得るともいえる。

ジョン万次郎は、価値観の違う異文化の社会を目の当たりにして、いろんなことに驚き、考え、感じ取ったことだろう。またそれは同じように、ジョンを取り巻く人々にも、異文化に育ったジョンの振る舞い、行動、言動が周りの人々を驚かせ、感動を与え、考えさせていったのではないだろうか。だからホイットフィールド夫人がジョンに声を掛けたことは、ジョン自身が人間として「自由と平等」を考え

るきっかけになったであろうし、またそれは、ホイットフィールド夫妻自身がジョンと出会い、そのことを確かめるきっかけとなったのであろう。お互いが惹き付けられていく関係がそこに存在していたのだ。ジョンを取り巻いてきた様々な境遇は、その惹きつけられていく関係によって、いろんな場面においても、彼は生き抜くことができたのである。

その生き抜く力とは、ジョンの強い執念である。ジョンは、日本に帰りたかった。ふるさとに帰りたかった。その執念が様々な境遇に立たされても、生き抜く原動力となり、周りとの関係を、惹き付けられていく関係として構築出来たのであろう。

そこまで彼を奮い立たせていく執念こそ、彼が育てられていく中で築き上げられてきたものでなかろうか。愛された人のもとに帰りたい思い。自分を産み育ててくれたところに帰りたいという執念である。

しかし、考えてみればジョン万次郎の話は、「浦島太郎」の話である。助けた亀につれられた訳でもないが、竜宮城ともいえるアメリカに行き、見るも珍しいものに触れ、まさに竜宮城で時を忘れ生活が出来たはずであるが、いつも「自分には帰るふるさどがある」、「ふるさとに帰りたい」という思いが彼を竜宮城で自らを見失わない眼を持つことができたのではないか。彼の思いが貫いていたことが、彼を日本まで連れ戻していったのである。

彼の人生を振り返ると、数奇な運命を生きた偉人として、時代と世界に翻弄されながらも生き抜いてきた人間ということがわかる。その人生は誰も真似出来るものでもない。その生き方の根底にある「生き抜く力」こそが、「サムライ魂」であったのだろう。

著書は、淡々と彼の生きざまを書き綴っていくが、その著者に響くジョン万次郎の「サムライ魂」こそ、ふるさとや母への強い思いと、そこに繋がっている熱い心であったのだ。

この「ふるさと」への強い思いを持つことの出来る人。帰る場所を持つことの出来る人が、一人では出来なくとも、その思いが繋がっていくことにより、世を変える力と成り得るのではなかろうか。

『西の魔女が死んだ』 梨木香歩 著

生きるための力

物質化学工学科2年 小谷 ひかる

「ニシノマジヨカラヒガシノマジヨヘ オバアチャンノタマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」
西の魔女こと主人公まいのおばあちゃんが死んだ

後にガラスに出てきたあであろうこの文字。私はこの言葉が一番心に残った。

死とは何か。そもそも私達はなぜ生きているのか。この本を読むまでも、私はよくそんなことを考えた。でもそのたびに答えは見つからず、死んでいくために生きているのかとさえ思った。生きていても勉強、会社、複雑な人間関係など、大きくなっていくにつれてしんどい、面倒くさいと思うようなものばかりが増えていきそうな気がして、あまり生に対して良い印象は持てなかったからだ。しかし逆に、死というものに対するイメージも私にとってぼやっとしたもので、悪いとも良いとも判断し難い、不思議なものでしかなかった。むしろ、「死んだら何もかも終わりだから希望を持って生きるんだ」と世間的に死ぬのはよくないことというように言われていることに対して、くさい、そんなこと本当に思える人なんているのかと、ちょっとひねくれた考えを抱いていた。しかしこの本を読んで、最初の言葉のように、死というのは魂が自由になることで、何もそこで終わるわけではないんだ。むしろ、魂が離れることで伝わったり、通じあったりすることができるんだという感じで、全体的に死が清々しく明るめに描かれていて、題名を読んだだけで身構えていた私は意表を突かれ、力が抜けた。こういう考え方もできるのかと、気分が晴れた。不思議なことに、死の話となると普通は暗く重くなるのが多いのに、まったく逆の気分になったのだ。この時私は、西の魔女の魔法にかかったのかもしれないと思ったと同時に、死に対する自分の中のイメージの変化に驚かされた。

また、おばあちゃん家に住んでいる間にまいの心が変化していったのも印象的だった。不規則な生活や今どきの面倒な学校生活で心を病んでいたまいが、おばあちゃんの魔女修行（主に、自分で決めて最後までやり遂げることを受けるのだが、はじめ、どれも単純で当たり前のことばかりだったので、こんなので変わるはずがないと思っていたけれど、まいの頑張りや意志や判断力などが培われ、強くなっていく姿をみていくうちに、簡単なことほど逆に実行するのは難しく、ちょっとしたことの積み重ねで人はすごく変化するんだと、この本から学ばせてもらった。また、何事もあきらめずにやろうと決めたことを最後までやりぬくことが、その人の気持ちをしっかりとたせ生きていく力にもつながるのだろうし、周りの人にも良い印象や影響を与えることができると思うので、その分運もついてくるのかなあと感じた。

「西の魔女」。この語をはじめ目にしたとき、ただのおばあちゃんなのになぜこのように言われているのだ

ろうかと、不思議だった。でも今なら少しわかるような気がする。実際に魔法を使えなくとも、まいだけじゃなく、こんなにも読み手の心をも動かし、それぞれに変化を与える力を持っているのだから。まるで魔法をかけたように。西の魔女と呼ばれる理由は、そういうことも含まれているのではないだろうか。このおばあちゃんの力は死んだ後もまいの心に残り、また次へ次へとリレーのように伝わり、消えないだろうと思う。私はこの本を読んで、改めて魔女のすごさを知ったと同時に、今までの、やることが中途半端な自分にも気がついた。これから目標をしっかり持ち、それに向かって必死に生きようと思う。

城 フランツ・カフカ 前田敬作 訳

権威に対してどう向き合うか

－「城」を読んで－

物質化学工学科3年 隅谷 大良

この本を読み終えた直後の印象は温かいものでした。物語にはたくさんの登場人物が出てきて、主人公と交流し、主人公を助けようと行動しているように思えたからです。しかし、よく読み返すと主人公は周囲のことが理解できず孤独なので、冷たい話だと思うようになりました。

フランツ・カフカの作品には「掟」というキーワードがよく出てくるそうです。この『城』という作品を読んでも確かにそう感じました。主人公は測量士のKで、ある城が統治する村へ雇われてきます。しかし仕事はありません。彼は城へ行こうとしますがたどり着けません。代わりに役立たずの助手をつけられます。Kは城と何とかして関わりを持つようと、長官に会うためにあらゆる手を尽くしますが、結局会うことはできません。そのままこの物語は終わってしまいます。私が注目したのは、Kが何度も城に敵対するようなことを行っていたことです。例えば、城の関係者しか泊まれない宿屋で夜をあかしたこと。別の、城に指定されたと思われる宿屋のおかみの忠告を、あれこれと理由をつけて受け入れなかったこと。城からつけられた助手を追い出したことなどです。故意にしてもそうでなかったにしても、Kは城の取り決めに逆らいました。

城はすべての掟の根源なので、社会的権威です。城の影響下にいることを受け入れ、城の決まりは越えられないということを認めている間は、普通の村人であることができます。反対に従わないならば、社会から疎外されることになり、実際にこの話には

村八分にされている家族が出てきます。この論議からすると、Kに仕事が無く長官に合ってもらえなかったのは、Kが掟を守らなかったからということになります。ところで、物語の終盤に出てくる場面で、Kにこの状況から抜け出すチャンスが訪れたのではないかと私は思います。城の役人はいつも厳格で事務的なのですが、Kが夜中に城の秘書の一人と話す場面で秘書は、夜は問題を個人的に考えがちだから苦手だ、相手の願いを叶えてやれずにはおれなくなる、と言ったのです。

私は、「城」という作品が何を伝えようとしているのかがなかなか分かりませんでした。今は、権威に対してどう向き合うかを伝えていて考えています。例えば学校では、学校側の規定した物事をその通りに行わなければなりません。なぜそう規定されているのか理由を理解していれば従い易くなりますが、いつも分かるとは限りません。Kの場合はそのとき、立ち向かってみて悪い事が起これば服従するという態度をとりました。他方、分からないからといって反抗すればどうせ悪い目に遭うのだから、盲

目的に服従するという事もできます。私は、どちらの態度も避けるべきだと思います。前者の場合は取り返しのつかない害を被るかも知れず、後者の場合はマインドコントロールにつながるからです。何としても理解に努めるしかないのです。分からないなら、秘書がくれたようなチャンスを使う、つまり権威に属する人に個人的に訊くべきなのです。Kはあの時、なぜ自分がこんな状況にあるのかを訊きさえすればよかったのですが、残念ながら眠ってしまいました。

この物語は断ち切られたように終わります。調べると未完だそうです。しかし、Kが態度を変えない限り、この先も城にたどり着くことはできないと思います。

図書館の利用にあたっての注意

図書館の本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。

学生図書委員会 活動報告ほか

古典文学を読んでみて

4C 中谷 美智

皆さんは「日本の古典文学」と聞いて、最初に何を頭に思い浮かびますか？

私はまず始めに紫式部の「源氏物語」が思い浮かびました。他にも清少納言の「枕草子」や「竹取物語」、「平家物語」、「方丈記」、「徒然草」…etc. があり、「日本の古典文学」と聞いたらだいたいは平安時代～鎌倉時代の文学を思い浮かぶと思います。今回はその時代の中で生まれた作品を紹介させていただきます。

今回紹介する本は、ちくま文庫の「とりかえばや物語」（中村 真一郎訳）です。この本は平安時代末期に成立したと推定されている作者不詳の古典文学「とりかえばや物語」を現代語訳にアレンジして出版されています。因みに「とりかえばや」とは「取り替えたいなあ」という意味の古語であり、ページ数は250ページぐらいなのであまり長い話ではありません。

物語はある権大納言（平安の貴族）の二人の妻に美しく顔立ちがそっくりな男子と女子が産まれたところから始まります。ただ、この二人はなぜか成長していくにつれて姫君が男性的な性格になり、反対に若君は女性的な性格になってしまいました。父親はそのことに非常に悩ませていましたが、ついに父親は姫君と若君を取り替えて育てることを決意して、二人は性別とは反対の成人の儀式をします。その後、男装の女子である「若君」は宮廷（男性ばかり）へ女装の男子「姫君」は後宮（女性ばかり）へ出仕し始めるようになり、二人とも次第に自らの天性に苦悩し始めることとなります。

この物語は男女の入れ替えというかなり非現実的な話をしてしていますが、平安時代の人間関係や心情の描写は現実的で物語がしっかりしていると思えました。話の中には「源氏物語」と近い色恋沙汰の展開があって恋愛色が少しきつめですが、話の中で出てくる主人公達の悩みは現代で通ずるところがあり、古典文学にしてはけっこう読みやすい内容でした。

古典文学は昔の単語の意味が分からないことが多かったので今まで読むことはありませんでした。でも、現代語訳されているこの本は小説と変わりなく、内容も堅苦しくもなかったので普通に読み進めることができました。

この本はもちろん図書館に置いています。他にも図書館には色々な現代語訳された古典文学が置いていますので、一度古典文学に触れてみてはいかがでしょうか。

ブックハンティングについて

2I 嶋田 友樹

みなさん、こんにちは。今回は、ブックハンティングについてみなさんにお話にしようと思います。

ブックハンティングとは、年に2回——梅雨の時期と冬の始まりの時期行われる、図書委員会のビッグイベントの1つです。

まず、ブックハンティングが開始される前に図書委員を通じて、全学生から奈良工業高等専門学校（以下、奈良高専）の図書館で貸し出しを行ってほしい図書——通称、希望図書の募集を行います。募集期間を過ぎると、図書委員の担当の教諭が一旦、希望図書の書かれた用紙を全て回収し、図書委員会全員で、希望があった図書が予算内に収まっているか、図書館で貸し出しを行うに相応しい本であるかを査定します。そうして、購入が決まった図書を、大阪府の梅田にある「ジュンク堂書店」で一斉に購入を始めます。以上が、ブックハンティングの大まかな流れです。

ブックハンティングの醍醐味はと言えば、何と言っても、ジュンク堂書店へ本を買いに行くことでしょう。本の購入は、主に土曜日に行われます。ブックハンティングにいらっしやっただけのみなさんは恐らく、ジュンク堂書店で見る多量の本に圧倒されたことでしょう。私も、ジュンク堂書店で見る多量の本に圧倒されました。本が好きな人にとっては、たまらない空間となるはずですよ。

各クラスから希望のあった分の図書を購入すれば、その時点でブックハンティングは終了です。後は帰るだけ

になるのですが……。 「帰りは団体で」ということは無いので、各クラスの希望図書を購入し終われば、自由解散となり、好きに本を見て回ることができます。先程も申しあげたように、ジュンク堂書店はかなり大きな書店なので、探している本等があれば、きっと見つかることでしょう。

以上のように、ブックハンティングは非常に楽しいイベントとなっております。予算に余裕があれば、図書委員会以外の方もブックハンティングに参加できますので、本が好きな方は是非ブックハンティングに参加してみてください。

「ファイマン物理学」

5E 山田 諒明

「ファイマン物理学」というと皆が一度は耳にしたことがあるだろう。有名なだけあり、もちろん奈良高専図書館にも洋書版、邦訳版ともに蔵書されている。が、あまり借りられてはいないようである。

外観はA4ハードカバーで厚み2cmほど、それが洋書版は3冊、邦訳版は5冊で構成される。カバンに入れて運ぶには1冊でも少々重いだらう。内容はファイマン博士がカリフォルニア工科大学で学部1,2回生に対し、2年間にかけて行った物理学の講義の内容をまとめたものであり、例題、演習問題ではなく文章での説明が中心となっている。問題の解き方の教科書ではなく、理解そのものを高める教科書といえるだろうか。

実際読んでみると、まずはじめは内容が難しい、これに尽きるだろう。内容は高度で、微積分は当然のように使えないと話にならないし、議論そのものが自分の得意な分野のものでさえも間違えなく難しいと感じることだろう。この内容の講義が大学1,2回生に対して行われていたのかと思うと、よくもまあこんな高度なことをやったものだなと圧倒される。(もっとも1,2回生のほとんどは脱落し、3,4回生や院生が満員で聴講していたようだ)

しかし、理不尽な難しさというわけではない。わかりにくい専門書にありがちな、理論説明が途中で急にジャンプしたかのような説明不足に陥っているところはほとんどなく、高度で難しいだけで道理に従った流れで説明が行われている。また、数式での議論だけで「数式上でこうなるんだから物理現象もこうだ」といった誤魔化しめいた説明ではなく、それが実際どういう現象なのかというイメージそのものをつかむための説明が行われている。つまるところ、難しい教科書であるが、それに見合った理解度の上昇を望める教科書なのである。また、すでに理解しているつもりの内容でも、より非常に高度な議論に触れることで広い視野が得られることだろう。

物理学およびに数学が得意で、高専の授業内容が簡単に思っている人にはぜひとも1回、自分の得意分野の1冊でいいのでこの本を読んで貰えればと思う。簡単に読み進めることはできないが、自分の知っている先にはこんな世界が広がっているだということを知ることができるだろうし、また物理への深い理解を得られるだろう。

本の取り扱いについて日頃思っていること

4M 谷口 皓平

図書館だよりの原稿を書いてくれと言われて、二つ返事で引き受けたものの何を書いたらいいのかサッパリわかりませんでした(笑) どうせ学生はあまり見ないだろう、という希望的観測から図書館の本の取り扱いについて日頃思っていることを書いてみようかなと……

奈良高専の図書館には大きく分けて専門書と一般図書(文庫本など)の二つがあります。一般図書はネットや町中の本屋さんで比較的簡単に購入することができますが、図書館にある専門書は値段が高かったり、絶版になっていたり個人が簡単に購入することができない本が多いです。(私がいる機械科の場合)低学年のころはレポートの数も少なく、内容も比較的簡単であるためあまり専門書を必要とすることがありませんが、学年が上がるにつれて専門書を見る機会が増えていきます。その際に本の取り扱いについて今一度気を付けてください。図書館の多くの専門書には折り目が付いていたり、アンダーラインやメモが書いてあります。濡れた跡やページが破られている本も多くあります。また毎年多くの本が行方不明になっています。図書館でも図書の修理や再購入を行ってはいますが、あまりに量が多いため全く追いついていないのが現状です。図書館にある本は、これから先も多く多くの学生に必要とされていきます。折り目やアンダーラインを付けたいならば写真を撮ってください。自分のものにしたいなら自分で買ってください。奈良高専の学生なんですから「学校のものみんなのもの、大切に使いましょう」などと小学校で教わる常識ぐらい言われなくとも守って本を大切に扱ってください。

なんだか自分の意見というよりも、世間一般の常識を書いただけで原稿が埋まってしまいました。あちらこちらに上から目線の内容が書いてある気がするよな……えい、ままよ！送信！

Information



読書週間

今年も学生図書委員会の活動として、読書週間の展示を行いました。今年のテーマは「世界遺産」に関する本。関連する書籍を並べ、飾りつけを行いました。展示している世界遺産の風景写真の場所を展示書籍を使って探すクイズも行いました。展示した写真は読書週間終了後も図書館内で展示を行います。



ブックハンティング11月

恒例のブックハンティング（今年度2回目）を11月16日（土）14:00から2時間ほど、大阪堂島のジュンク堂書店大阪本店で行いました。本科学生23名のほか専攻科生1名、教職員7名が参加し、約200冊の図書を購入しました。



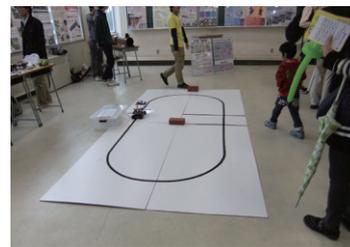
第2回メディアコンペティション

本校図書館では、学生チャレンジプロジェクトやロボコン・プロコンといった学生の主体的な取り組みに対する相互的な意見交換の場として、「奈良高专メディアコンペティション」を開催しています。

今年度は高专祭の科展の1つとして各団体によるポスター展示を行っており、一般の来訪者をはじめ多数の学生や教職員に会場頂きました。

来場者のアンケートによって選ばれた上位3団体につきましては、1月6日（月）に表彰を行っております（5ページの写真をご覧ください）。

出展したポスターは全て図書館入口付近に掲示してありますので、お時間のあるときに足を運んで頂ければと思います。図書館のホームページにも掲載する予定です。



編集後記

図書館だより 71号にたくさんの記事を寄稿頂きましてありがとうございました。改めまして、お礼申し上げます。

来年度以降も、ますます活発な図書館を目指して様々なイベント等を行う予定です。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(図書館)



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/library/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。